

Title	シモーヌ・ヴェーユのキリスト教観 : 近代科学との関係から
Author(s)	宮川, 文子
Citation	Gallia. 1979, 18, p. 163-171
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3541
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

シモーヌ・ヴェーユのキリスト教観

— 近代科学との関係から —

宮 川 文 子

ガリア17号で、我々は、シモーヌ・ヴェーユの近代科学に対する見解を見てきた。そこで彼女が、特に問題としていたのは、科学が示した世界像であり、科学者が、物質としての力の支配する世界を、絶対の真理として人々に提示した点である。人はたとえ暗黙のうちにも、この地上で善や正義が行なわれるのを望んでいる。しかし科学は、こうした人々の内的希求を、空想でもあるかのようにはねつけてしまった、とシモーヌ・ヴェーユはみなし、この科学の横暴を厳しく批判したのである。その場合、近代科学は、どこで間違っただろうか。現実を、恣意的に歪めて解釈したことだろうか。決してそうではない。彼女は、自然の諸力を支配するメカニズムをとらえる上で、科学の果たした役割を高く評価している。問題は、近代科学がその限界を認識することなく、自らを唯一絶対の真理として、科学万能主義の風潮を作り出したことである。

ところで、科学者を始めとして科学にたずさわる人たちが、その限界を正しく認識するためには、彼らが知性より上の次元に立っているか、あるいは、上の次元を認めるかすることが必要である。その上の次元のものは、宗教である。シモーヌ・ヴェーユは、諸学問、特に科学に対する宗教の大きな影響力を認めていたから、近代科学が独走し、自らの限界を見失った背後には、キリスト教に原因があるのではないかと考え、その点の考察へと進んだ。近代科学の唯物化、ないし非宗教化に、キリスト教が孕む問題を察知し、その批判検討に向かうシモーヌ・ヴェーユは、その検討と自分の体験から、独自のキリスト教観を展開するようになる。そこで、本論では、まず彼女の宗教的求道のみ、その上で科学との関係に的をしぼり、彼女のキリスト教理解とその批判点とを明かにしようと思う。

I

1941年、マルセイユに滞在していた時、シモーヌ・ヴェーユは、ペラン神父に出会った。この出会いは、彼女が生来持っていた真理追求への渴望に答え、彼女にキリスト教を見直させ、キリスト教観を深めさせる契機になった。まずその真理追求の願望の具体的な内容を知るためには、神父に出会う以前の彼女の求道の跡をたどってみる必要がある。

彼女が靈的自叙伝と名づけ、ペラン神父に託した手紙によると、彼女は幼少期に特別な

宗教教育を受けず、神の問題は、この世に材料が欠けているという理由で、考えることを禁じたが、行動においては、隣人愛・清貧といったキリスト教の徳をとり入れようとした。またこの手紙は、思春期のころ、彼女を最も悩ましたのは、真理の問題だったことを教えてくれる。

わたしは、14歳の時、思春期の底なしの絶望におちいりました。自分の生まれつきの能力が、凡庸だからというので、まじめに死ぬことを考えました。…わたしは、外面の成功が得られないことを嘆いたのではなく、本当に偉大な人たちだけが入れる、真理の住むあの超越的な国に近づくことを望めないということを嘆いたのです。真理なしに生きるよりは、死ぬ方がよいと思いました⁽¹⁾。

このように、彼女にとって真理の問題は、その生命に匹敵するほど重い現実性をもっており、人生の価値を決定するものである。そこで、彼女の求道は、行動においては出来るだけキリスト教の徳を実践すること、知的探究においては、ひたすら真理を望み注意を払うことから始まったと言えよう。

シモーヌ・ヴェーユの真理への希求は、アランによって育まれ、具体的なものとなる。アランは、知的探究の方法を示し、どんな事柄にも核心をつく観念を表明することができた。彼は、認識には内的条件が重要であり、そのためには肉体的欲望や情念、想像力にとらわれてはならないこと、外的な集団や社会は、精神を失っているため深い思索ができないことを強調した。宗教について彼は、諸宗教に敬意を抱いており、その中心には、義人というべき人間の犠牲があると考えていた。また彼は、神の存在の証拠は、真の信仰にとって何ら重みを持つものではなく、想像の産物である神を崇拝しないことが重要であると教えた。彼女は、アランを通してその先生であったラニョーからも学んだ。それは、無神論の意味についてである。彼女は、無神論は、神の観念を浄化し、偶像崇拝を斥けるという大切な役目をすることを教えられたのである。

彼女はこれらの教えを、社会活動に参加することにより、その中で深め、自分の思想として発展させていった。彼女の社会参加の中でも、長期間にわたり特に重要な意味をもつことになったのは、工場労働者の経験である。では、この経験は、彼女に何をもたらしたのだろうか。その意味を正しくつかむために、まず彼女が労働者をどのようにみていたかを知る必要がある。

彼女の理想とする労働者像は、きびしくつらい現実にも直面しながらも、誇りと喜びをもって敢然とそれに立ち向かう、勇敢な人間である。この理想像は、彼女の自由観と結びつく。彼女の考える自由は、目的を達成するにあたって、物質を支配しているメカニズムをとらえ、それに基づいて自覚的方法的に行動するところに成り立つ。この自由観は、強制や束縛から解放された状態こそ自由であるとする考え方に対立し、人間に課せられた強制

を、積極的に引受けようとするストイックな精神に支えられている。彼女の考えでは、あるべき労働者は、自分に課せられた仕事を引受け、このストイックな自由を実践することで、人間としての誇りや喜びを感じるのである。一方彼女は、この自由の対極にあるものを隷従ととらえ、隷従する人間を奴隷という語で規定している。それによると、奴隷とは、思惟する能力を奪われている者、他人の思惟に盲目的に追従し、肉体の非理性的な反作用によって行動する者である。

現実の労働者は、この自由と隷従との二つの極の間に存在し、それぞれの労働条件や主体性により、どちらかの極に近くなると言える。彼女の分析では、熟練工は自由の極に近くなり、流れ作業で働く労働者は、隷従の極に近づく。彼女は後者の立場に身を置くことで、次の二つのことを目ざした。即ち、自由と労働に関する自分の思想を現実につき合わせ洗い直すことによって、その重さを確かめること、ほぼ隷従の状態にあると言ってもよい労働者が、どのように主体的に、自由と誇りを得られるのか見出すこと、である。

彼女の体験した工場での労働は、知性を働かせる努力や個人の善意、自発的な服従心に訴えることなく、それらとは無関係なところで行なわれる。機械と上役の命令に、ほとんど無条件に従わねばならない労働者は、機械より以上であっても以下であってもいけない存在、ものに等しい存在に追い込まれる。シモーヌ・ヴェーユは、あらゆる虚言や慰めを排し、高度の注意力と鋭い感覚を駆使してこうした境遇を生き抜くことにより、この生活が自分の感情や心理を左右し、ひいてはその内面生活をも支配するに到ったのに気づく。この現象は特に、無意識のうちに、社会的なものに支えられていた自尊心の感情を奪われ、かわって、社会的に劣っている、自分は価値がないという意識を受け入れざるを得なくなる、という形で現われる。そして、ついに彼女は、赤裸な自分の姿を見出す。つまり、自分が、知性や意志によって何ら栄光を与えられる存在ではなく、単に外部の諸力に従うだけの一片の肉体にすぎないことを発見するのである。またその中で、唯一の人間的な行為は、注意をこらしてあるがままの自分の姿を見つめ、この還元できない苦痛を担うこと以外にはないことを知る。彼女は、この時魂に受けた深い傷について、先にあげたペラン神父への手紙の中で、

「ローマ人が、最も軽蔑する奴隷のひたいに、赤く焼けた鉄でしるしをつけたように、わたしはあそこで、永遠に奴隷のしるしを受けました⁽²⁾」

と告白している。

そこで、この体験の意味は、次の二点に集約される。第一に、彼女が自分の思想の正しさを、現実の中で確かめることができたということ、第二に、隷従状態にある人間が、不純な動機によらず、主体的な努力によってのみ自由を回復し、正当な自尊心の感情を得ることは、ほとんど不可能に等しいということを確認できたことである。第二の点を、シモ

ーヌ・ヴェーユの立場に照らして主観的にみると、人間の価値は、決して社会的なものだけでは決定されないはずなのに、実際は、個人が意識しないうちに社会的に決定されている。そのため底辺にいる人々は、やり場のないにがにがしさを感じながら、自分は価値のないものだとみなさざるを得なくなってしまう、という人間の根源的な苦悩に接し、それを生きたということである。彼女は、この人間に負わされた癒しがたい苦悩を、不幸と名づけ、以後ひたすらそれに注意を傾け、その意味をみきわめようとした。

1935年、9ヶ月に及ぶ労働者生活を終え、肉体的にも精神的にも極度の疲労状態にあった彼女は、ポルトガルの漁村で、古い聖歌を聞く機会を持った。その時、彼女は、「キリスト教は奴隷の宗教そのものであり、奴隷は、キリスト教に執着せずにはおれないし、わたしもその奴隷のひとりである⁽³⁾」という気持が体内に湧き上がるのを感じたのである。こうして彼女は、キリスト教こそ、社会的に虐げられ奴隷状態に追い込まれた人間に、本来の尊厳性を与え得るという確かな思いを抱くことになる。がしかし、この確信が、彼女を教会へ導いたわけではない。彼女は、教会の外で、なぜ真理を望んで不幸に陥るのか、不幸とは何かを解明することを自らの使命とし、不幸体験を反芻し、内省を続ける。そして次のような認識に達した。

彼女の説明によると、この世に不幸があるのは、言いかえれば、善や正義を求める人間が、何物にも還元できない苦痛に陥るのは、この世界が絶対的な真理や善を欠いており、物質的なメカニズムによってのみ支配されていることを示している。また同時に、人間も世界の一員としてそのメカニズムの支配を受けており、有限な存在であることを示している。ただ真理や善への願望と、そこから生まれる注意力のみがこの支配を逃れている、と彼女はみる。つまり、世界や人間についての、この根本的な事実を動かしがたい真理として受け入れることが、不幸を変形する道であると彼女はみなしているのである。この受け入れるということは、必然性の支配に同意すること、即ち、自分を苦痛におとし入れる自然的・社会的メカニズムに、自発的に服従することからなっている。彼女は、それを愛による従順と呼び、不幸に馴れ合って無気力にすべり込むことを防ぐ唯一の道だと考えるのである。彼女の、この必然性への同意という考え方は、ストア派の運命愛に通じるものであり、彼女自身この同意を宇宙愛と呼んでいる。

こうした認識と平行して、彼女は実生活において、持病の頭痛と闘いながら、この人間の理解を超えた不幸を受け入れようとする態度を押し進めていく。そして彼女は、何度かキリスト教の内面性に触れた後、1938年、激しい頭痛に悩まされながら、『愛』という詩を、その美しさにひたすら注意を集中して暗唱している時に、“キリストにとらえられる”という神秘を体験する⁽⁴⁾。この彼女の神秘的体験には、美的要素や肉体的苦痛が大きな役割をしており、また運命愛や認識への要求がみられることが特徴である。とにかく、この体験により彼女は、必然性が神の愛を内包しており、世界の美しさとして啓示されていること、真理を望んで不幸を忍ぶことは、キリストへの道であるという確信を得たのである。

以上が、ペラン神父に出会うまでのシモーヌ・ヴェーユの求道の軌跡である。

II

シモーヌ・ヴェーユは、ペラン神父との出会いにより、これまで自分の内面に保ち続けてきたキリスト教への傾倒を、はっきりと表に出すようになる。神父は、この高潔な魂の持主が、さらに一層神の愛に向かって心を開き、従来の体験を見つめ直し、信仰や教義について真正面から取り組むように導いた。その結果、彼女は、カトリックの深さと美しさに強く心を打たれ、また神父の愛徳にひかれながら、キリスト教の神について深く考えるようになった。こうした指導や省察、体験の再検討を通じて、シモーヌ・ヴェーユのキリスト教観は、新たな展開を遂げた。その要点は、キリスト教の神が、ユダヤの伝統とギリシア精神との二面性を持っていること、この二面性との関係から真理の探究を目ざす科学も位置づけられるべきこと、である。そこで、以下その具体的内容についてみてみよう。

Iでみたように、不幸体験によりシモーヌ・ヴェーユの人間観や世界観は深められ、より根源的な形をとるようになったが、それ以来彼女は、思想・文学を始めとしてキリスト教も、不幸が開示した真理に照らして理解するようになる。こうして彼女は、旧約聖書を通してユダヤの伝統に触れ、また従来親しんだギリシア古典を、新たな視点でとらえるようになる。そしてこの二つの伝統が、どのようにキリスト教思想に流れているかを会得するに到る。まず、彼女がユダヤ教についてどのようにみていたかを明かにしてみよう。

彼女は、イスラエルという集団に語りかける神や、選ばれた民という考え方を受け入れることができず、ユダヤの神を、民族の偶像神とみなしている。彼女の考えでは、ヘブライ人に虐殺を命じ、他の文明を破壊させた点に、この神の物質的で集団的な、民族の偶像といえる性格が出ているのである。また彼女は、ヘブライ人は選民思想のもとに行動したため、地上のすべての人間を支配する必然性の冷酷さに気づくことができず、物質的な力を賛美し、善悪の観念を失うに到ったと痛烈な判定を下している。彼女はイスラエルの民が、唯一神の啓示を受けたことを認めながらも、彼らの神が、直接的で粗暴な形で世界や人間にかかわるため、強い反発を感じ集団感情が作り上げた偶像であると断言するのである。このように、シモーヌ・ヴェーユはユダヤ教の神を否定的にしか評価していない。

一方彼女は、ギリシアの伝統には、人間をとりまく条件の峻厳さをとらえる明敏な意識が流れており、それがこの伝統の特徴になっていると考えている。彼女の見解によると、『イリアス』や悲劇のいくつかは、不幸を比類ない明晰さと正確さで描き出しているが、これは、必然性の支配に対する深い洞察がなければできないことである。また彼女によると、プラトンは二元的に世界をとらえたが、それはこの世界における必然性の支配を示すためであり、またこの必然性が善の説得に従うという彼の説明は、それが世界の秩序であり、人間の従うべき模範であることを示すためである。彼女は、世界の秩序としての必然性という考え方を、宇宙を愛し宇宙と一致するように教えたストア派の中にも見出してい

る。このように、ギリシア人には、世界を支配する峻厳なメカニズムをとらえると共に、それを世界の秩序として受け入れようとする精神がみられるが、シモーヌ・ヴェーユはそこに、非人格的な神の観念が想定されていると考えている。そして、ギリシア人は、神を非人格的にとらえることにより人間に想像できない超越的な存在とし、必然性の支配下にある物質的な諸力に左右される人間の姿を、はっきりと把握することができたと同時に、正しい善悪の観念を持つことができたと高く評価するのである。

神の観念について、ユダヤ思想とギリシア思想に対する彼女の見解をまとめると以下のようになる。ヘブライ人は、唯一神の人格的側面を強調しすぎたために、神を人間の位置に低め、よって集団の偶像神に墮落させてしまった。ギリシア人は、神を非人格的にとらえることにより超越的な存在とし、あわせて必然性に支配される人間の悲惨を正しくとらえ、善悪の観念を失わなかった。しかも、このギリシア精神は、ユダヤ教の神を高めた。つまり彼女は、ギリシア精神により、ユダヤ教の神が浄化されて、キリスト教が成立したと解釈するのである。そこで以上のような背景を基礎にして、シモーヌ・ヴェーユのキリスト教理解を、科学との関係を考慮しながらみてみよう。

彼女のキリスト教への関心は、全能であるべき神が自分を無とし、辱しめながらも十字架上で死ぬまで従順だった、ということに集中している。彼女はここに、神が愛であることを示すキリスト教思想の中心が見出されると考えるのである。受難について、彼女は次のように解釈している。神は、愛により受肉し人間として生きること、人間の置かれた本質的条件を明かにしたのである。つまり神は、この世では人は、冷酷な必然性の支配のもとで不幸に委ねられており、罪のない人の不幸があり得るということを啓示したのである。そこで人は、この神の愛をはねつけることなしに、不幸な人をはねつけ軽蔑することはできないのである。十字架について彼女は、それが神と人間との無限の距りを示すものであり、同時にその距りを通して神と人間が会う点、即ち自然と超自然との交点を示すものであると考えている。従って十字架は、不幸な人間にとって救いへの道である。彼女にとって、十字架を担うとは、人が自己の存在のあらゆる部分において必然性に支配されていることを知り、それに同意することであり、キリストの従順に倣うことなのである。受難と十字架の意味を、以上のように理解することにより、彼女は、キリスト教思想の根底にギリシアの精神が流れており、それがさらに明確に絶対的なものとして啓示されていると考えるのである。さらに彼女は、福音書には、ギリシア人が理解した非人格的な神の観念が表明されていると考え、次のように述べている。

福音書は我々に、キリストの教えのごくわずかな部分しか伝えてくれないが、にもかかわらず、そこには魂の超自然的物理学とでも名づけられるものが見出される。あらゆる科学理論と同じように、この科学理論には、明晰に理解され実験によって確認されるものしか含まれていない。ただこの場合の確認は、完全性へ向かう歩みによ

ってなされる⁽⁵⁾。

このことを具体的に示すために、彼女は種子の譬えをあげ、この話が意味していることを明かにしてみせる。それによると、恩寵は、神のところからあらゆる人間に降りそそぐのだが、それが受け入れられるか否かは人間の側の条件に左右され、そこに人格としての神は介入しないというのである。福音書の譬えをこのように理解することにより彼女は、福音書と自然科学とが、それぞれに何を対象としているのかを明確化している。彼女の考えでは、自然科学は、「価値に対するいっさいの考慮なしに、事件を事件として生起させる条件⁽⁶⁾」である自然的メカニズムを対象としており、一方福音書は、価値への考慮を含み、「純粋な善を純粋な善として生じさせる条件⁽⁶⁾」である超自然的メカニズムを対象としている。その上、自然・超自然という二つのメカニズムは、同じ必然性の二面性を表わしており、自然的メカニズムは人間の側から見た場合に、超自然的メカニズムは人間の位置を越えたところから、神の側から見た場合にはっきりと現われるのである。従って彼女は、次のような結論に達する。つまり、福音書も科学も共に、神の意志に従う世界の秩序＝必然性にかかわるという点で対立するものではなく、ただそのかかわり方により、科学は知性の次元にとどまることになるが、宗教の靈感を受け入れることにより、宗教的瞑想の一形式ともなり得るのである。以上のように彼女は、キリスト教の神に人格性だけでなく非人格性を認めることにより、キリスト教の精神が、非人格的なものとして真理を求める科学の精神と何ら対立するものではなく、むしろ科学に靈感を与えるものであると理解するのである。

しかし、ルネサンスを経て近代科学が誕生した頃、キリスト教は科学の中心的靈感となることができず、科学は、かえってキリスト教から離反することにより成長していった。これはどうしたわけであろうか。その点について、シモーヌ・ヴェーユは、キリスト教の方に問題があったのではないかと推察し、その歴史的展開をたどった結果、キリスト教のローマ化という現象につきあたった。ローマ帝国によるキリスト教公認問題について、教会は、自らの地上的発展を啓示の現実的展開として肯定し、一般にも、ヘレニズム的多神論に対し、唯一神の信仰が確立されたとみなし評価する傾向がある。それらに対し彼女は、魂の指導者である教会が、なぜ地上の強大な権力と結びついたのか、その要因を問いそれをつきとめようとする。彼女の解釈によると、ローマ人は、地中海周辺に培われてきた多様な伝統を、文明化の名のもとに画一化してしまったが、キリスト教だけはその迫害に耐え、自己の精神性を保持し、生きのびることができた。その理由は、キリスト教の中にユダヤの伝統が流れていたためである。つまり、前に触れたように、ユダヤ教の神は民族の偶像と等しい存在であったため、地上の権力にもよく抵抗することができたのであり、またキリスト教は内部にこうした要素を持っていたため、ローマ人によって皇帝の代役として採用されたのである。以上のように、彼女はキリスト教公認の意味を、キリスト教の内

部で、浄化されていたユダヤ的要素が甦り、それがローマ人の皇帝崇拜の精神に育まれ、神を人格的にのみとらえるローマ流の神の観念が成立したとみなし、そこにキリスト教の質的变化を認めるのである。

ではこのローマ流の神の観念は、キリスト教にどのような影響をもたらしたのだろうか。次にそのことをみてもみよう。ローマ流の神の観念は、非人格としての神の観念を認めないため、それに結びついた世界の秩序の観念＝非人格的摂理の観念もまた排除し、かわってその人格的神の観念に応じた摂理の観念＝人格的摂理の観念を採用するようになったと彼女は指摘する。彼女の考えでは、このローマ的摂理の観念は、ある特別な目的を実現するため、神が自ら世界に介入してくるという考えであり、知性に反するばかり、真の信仰にも背くものである。ところが、キリスト教徒たちは、この観念に基づいて世界の出来事を理解しようとしたため、知的誠実さを失い、世界についての科学的な観念を真剣に考えようとしなくなったと、彼女は批判する。彼女にとって科学は、世界に目的を認めず、必然性を研究の対象とすることで、罪のない人々の不幸があり得るというキリスト教的世界像を与えることができるのだが、彼らはこの真の意味を理解することなく、かえって科学的世界像を間違っただけとして排斥しようとする傾向を持つようになったのである。彼女はまた、教会内部では、ローマ的摂理の観念により、悪や不幸に対する正確な認識がなされなくなり、従順の徳が失われたと批判する。キリスト教徒は、この世界に見られる有限な善や悪に、神の目的や働きのしるしを見出そうとしているが、彼女の理解によると、この世界のもろもろの出来事はすべて神の意志に一致しているとみなすべきで、それらを例外なく受け入れることが神に対する従順であり、それによって神との合一が成就されるのである。彼女は、人格的摂理の観念により神が有限化され、従順の徳が行われなくなったため、信仰心も墮落したとみなすのである。

さらに彼女は、教会内部にみられる知的宗教的腐敗が、社会的存在としての教会に、弾圧や暴力を許したことを見逃さず、きびしく追求している。それは、純粋な信仰心の持主が、教会により異端として、破門にされたり弾圧されたりしたことをさす。なかでも彼女が問題としているのは、カタリ派を異端として滅ぼしたことである。12世紀に生まれたこのカタリ派は、マニ教の影響を受けて二元論的で、徹底的禁欲を説き、救い主としてキリストを認めるが、旧約聖書は退けるという特徴を持っていた。シモーヌ・ヴェーユの判断では、この派は、必然性の支配下にあるものとそうでないものとははっきり区別することにより、純粋な愛と正義の観念を保持しており、キリスト教におけるギリシア精神の復活と言い得るものであった。ところがこの派が滅ぼされたため、神の観念の墮落によりもたらされた、キリスト教の危機を回避する道は閉ざされ、信仰の領域と知的領域との分裂は決定的なものになってしまったのである。彼女は、カタリ派撲滅を犯罪行為とみなし、次にくるルネサンスを不毛なものにしたと、教会に辛辣な批判を浴びせる。というのも、二つの領域が区分されたため、ルネサンスはギリシア精神を、キリスト教とは別のものとみ

なし、知性の領域で理解しようと試みたからである。従って、彼女の見解では、このルネサンスをうけて生まれた近代科学は、宗教的靈感を中心に持つことができず、知性に基づいて描き出された世界を、唯一の真理として提示することになったのである。

以上まとめると、近代科学に独走を許した背景には、ローマのキリスト教公認に伴う神の観念の墮落がみられ、それがキリスト教徒に真の宗教精神を失わせ、科学に対する正しい評価と位置づけを失わせたのである。そこでシモーヌ・ヴェーユは、教会に対し、キリスト教の母胎をもう一度考え直し、神の観念を浄化することにより、原則においてだけでなく事実においても、カトリック教会が普遍性を回復することを要求したのである。

注

- 1) S. Weil, *Attente de Dieu*, pp.38—39, Fayard, 1966.
- 2) *Ibid.*, p.42.
- 3) *Ibid.*, p.43.
- 4) この体験について、シモーヌ・ヴェーユはジョー・ブスケにあてた手紙で、次のように説明している。

「極度な肉体的苦痛に襲われた瞬間、この愛に名前を与える権利は自分にはないと思いながら、愛そうと努めていました時、心の準備など何もしていませんでしたのに一といたしますのは、それまで神秘家たちの著作を一度も読んだことがなかったからです—わたしは一人の人間の現存よりもずっと人間的で、確実で、現実的なひとつの現存を感じたのです。それは、感覚でも想像力でも近づきがたく、愛するひとのこの上なく優しいほほえみを通して現われる愛にも似たものでした。その時以来、神の名とキリストの名は、ますます抗しがたく私の思惟の中で混じり合ってきました。」 S.Weil, *Pensées sans ordre concernant L'amour de Dieu*, p.81, Gallimard, 1968.

- 5) S. Weil, *L'enracinement*, p.225, Gallimard, 1963.
- 6) *Ibid.*, p.224.

(M. 51 追手門学院大学非常勤講師)